

様式 1

研究報告書（平成 26 年度）

提出者 坂 堅太

提出年月日 2015 年 4 月 13 日

【本ユニットにおける研究テーマ】

和文 サラリーマンイメージの「庶民化」と中村武志のサラリーマン家庭小説との関係について

英文

【研究のねらいと目的】（600 字程度）

本研究は、戦後日本におけるサラリーマン表象を分析し、その変容と背後にある社会的力学の解明を目的としている。サラリーマンという表象が戦後日本社会における庶民像の典型としてイメージされてきたことに異論を唱えるものは少ないだろう。こうしたサラリーマン像が確立されたのは高度経済成長期であると考えられており、1961 年 1 月 1 日から『読売新聞』紙上にて連載が始まった「われらサラリーマン」は、「みんなサラリーマンの時代」が到来したことを告げている。この「われらサラリーマン」の連載が始まる 4 年前、高度成長が本格化する直前の 1957 年に発表された加藤秀俊「戦後派の中間的性格」では、従来ブルーカラーの「労働者」として区分されていた大工が自らを「サラリーマン」と規定したことに対する驚きが記されている。このエピソードが示しているのは、1950 年代にサラリーマン表象の再編成がおこなわれ、その結果生まれた新たなサラリーマン像が高度経済成長期を通じて「みんな」を包含するものとなった、ということである。サラリーマンという表象が庶民の典型として選択されたことの意義とは何であったのか、その結果我々はいかなる社会を選択したのか、という問いの視点から、高度経済成長期の新たな把握を目指す。

【研究業績】 学会報告・論文など

（研究論文）

1. 坂堅太、「二重化された〈戦後〉—源氏鶏太『三等重役』論—」、『日本文学』、第 64 巻 2 号、pp. 33-43、2015 年 2 月〔査読有〕

（学会・研究会報告）

2. 坂堅太、「サラリーマン〈庶民〉表象の形成について—源氏鶏太初期サラリーマン小説に見る高度経済成長前夜のサラリーマン像—」、日本近代文学会 2014 年度秋季大会、広島大学、2014 年 10 月 19 日
3. 坂堅太、「「みんなサラリーマンの時代」へ—藤本真澄・源氏鶏太と東宝サラリーマン喜劇シリーズ—」、同時代史学会関西研究会、関西学院大学、2014 年 11 月 23 日

【成果の概要】（800字程度）

上記の業績（1）は、サラリーマン小説の代表である源氏鶏太『三等重役』について論じたものである。源氏鶏太の初期サラリーマン小説については、これまで『三等重役』に象徴される「戦後的」な「明るさ」が指摘されてきた。しかし他の初期作品群には、むしろ敗戦国としての〈暗い戦後〉が表出されている。業績（1）では、源氏の初期サラリーマン小説におけるこうした「戦後」の二重性を問い直し、『三等重役』の「戦後的」な「明るさ」が、占領期の薄暗い記憶を不可視化し、新たな「戦後」によってそれを上書きしたいという欲望、独立国家としての〈明るい戦後〉を求める人々の欲望と結び付いたところで成立していたことを明らかにした。

上記の業績（2）は、1920年代 - 50年代のサラリーマン小説を比較分析しながら、その変容の過程を跡付けたものである。1920～30年代に浅原六朗の「サラリイ・マン小説」や佐々木邦のユーモア小説に描かれていたのは、マルクス主義とモダニズムとの間で苦悩する「蒼白きインテリ」や、日常生活からは遊離した「逸民」としてのサラリーマン像だった。それに対し源氏の小説が描き出したのは、そうした階級的特性から解放された「庶民」としてのサラリーマン像であり、その背景には戦時体制時の労働政策とそれによる職員層の地位低下が関係していたことを明らかにした。

上記の業績（3）は、1950年代に東宝を中心として製作されたサラリーマン映画を取り上げ、そこで生み出されたサラリーマン表象の特徴を分析したものである。東宝サラリーマン映画の基調となったのは源氏鶏太原作の「三等重役」（1952年）であり、作品が強調したのは戦後民主主義により可能となった家族主義的会社空間である。この作品は臍首に怯えて卑屈に暮らす戦前のサラリーマンを描いた小市民映画と対照される形で、現代的であるという好意的な評価で迎えられた。以降、こうした「三等重役」の雰囲気を受け継ぐサラリーマン映画は大量に製作されていくが、その人気の背景には同時期に加藤秀俊や松下圭一が指摘した中間化、大衆社会化があったことを指摘した。

【通信欄】